

## 「蒙古襲来絵詞」の歴史資料としての価値：弓の形態をめぐって

著者	清水 久夫
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	43
ページ	13-30
発行年	1991-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10404">http://hdl.handle.net/10114/10404</a>

# 『蒙古襲来絵詞』の歴史資料としての価値

――弓の形態をめぐって――

清水 久 夫

## はじめに

肥後国の御家人、竹崎季長の文永・弘安の役における戦功を描いた『蒙古襲来絵詞』（宮内庁所蔵）は、鎌倉時代（<sup>1</sup>）にみられた写実的精神によって合戦の様子を忠実に再現しようとしたものであるとされ、信憑性の強い当時の記録として、美術史、日本史の双方から、その価値は高く評価されている。<sup>（<sup>2</sup>）</sup>この絵巻については、すでに多方面から論じられ、さまざまな指摘がなされているが、いまこの絵巻に見られる弓に注目すれば、日本軍が長弓を用いている（図1）のに対し、蒙古軍が中央に握りのある<sup>（<sup>3</sup>）</sup>式の短弓を用いている（図2）のがわかる。

この絵巻のなかで、竹崎季長の言ったことばとして、「弓

箭の道、先をもて賞とす。ただ懸けよ」と記されており、また、中世武士道のことを「弓馬の道」と言っていることからわかるように、当時、弓が遠距離攻撃用の主要な利器であるとともに、鎌倉時代の武士の象徴でもあったのである。つまり、絵巻を描くにさいし、絵師は長弓と短弓を注意深く描きわけていたことが充分考えられる。

そこで小稿では、『蒙古襲来絵詞』のなかに描かれた弓に着目して、その位置づけを行い、さらには、それをもとに、この絵巻の歴史資料としての価値について考えてみたい。

## 第一節 “異国”の象徴としての短弓

中世は大量の絵巻が作られた時代であるが、それら絵巻



図2 同右 上巻第7段

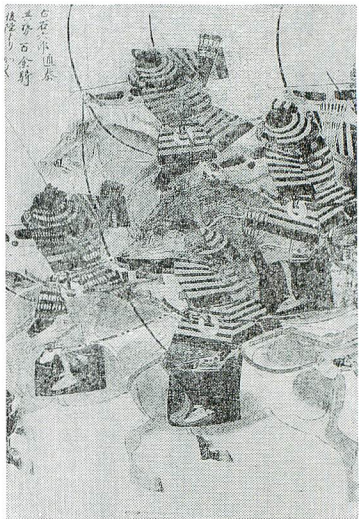


図1 「蒙古襲来絵詞」上巻第4段



図3 「吉備大臣入唐絵巻」第1段

を見ていくと、『蒙古襲来絵詞』のみならず、ほかの絵巻のなかにも、式の短弓が描かれているのを見ることができ。そこで、絵巻のなかで、式の短弓が見られる場面をひろいあげ、一覧表にしたのが、表1である。平安時代末から室町時代にわたり、模本も含むが、十八の絵巻をあげることができる。この表の順にしたがい、中世絵巻において、式の短弓がどのような場面で見られるかをみてゆきたい。

まず、①は『吉備大臣入唐絵巻』第一段である(図3)。日本の留学僧、吉備真備が唐に到着したとき、唐の役人たちが駆けつけ、真備を連行する場面である。唐の役人たちの手にしているのが、式の短弓である。

②―④は、『地獄草紙』(益田家乙巻)第五段である(図4)。法華の持者を悩まそうとして近づいてきた鬼神たちに毘沙門天が矢を射ようとする場面であるが、この毘沙門天の持つ弓が、式の短弓である。同じく⑤の『地獄草紙』(東博本模本甲)第三段では、地獄の鬼が罪人たちを追い込めている場面(図5)であるが、鬼たちの持つ弓が、式の短弓である。

③は、『彦火々出見尊絵巻』第四・五巻である。尊が龍王国から日本国へ往復する場面(図6)であるが、尊の従

者たちの持つ弓が、式の短弓である。

④―⑥は、『北野天神縁起絵巻』(承久本)第八巻である。(a)畜生道では、鷹をねらっている獵師らの持つ弓が、式の短弓である(図7)。また、(b)修羅道では、第一羅睺阿修羅と帝釈天の軍が交戦しているところが描かれているが(図8)、双方の兵士たちの持つ弓が、式の短弓である。⑥は、メトロポリタン本第三巻第二段で、大政威徳天が飛来して、輿から降り而上に礼拝する場面であるが、大政威徳天の眷属のなかのひとりの持つ弓が、式の短弓である。

⑤は、『東征伝絵巻』第二巻第四段、唐の役人が榮叡らを逮える場面である(図9)。榮叡らに先立って歩いている役人の手にする弓が、式の短弓である。

⑥『玄奘三蔵絵』では、(a)第二巻第二段、砂漠のなかを馬上に揺られながら行く玄奘の前に突然あらわれて、すぐに消えた異形の軍隊が進んでゆく場面。この異形の軍隊のなかのひとりの兵士が手にしているのが、式の短弓である。(b)は(a)に続く場面で、玄奘が天竺へ行く途中、第一烽の衛士から矢を射られる場面。衛士らは、式の短弓を持っている。(c)第四巻第六・七段、玄奘を襲った旃伽河(ガンガー河)の海賊が帰依する場面。海賊の弓は、式の短弓である(図10)。(d)第七巻第四段、玄奘が戒日王老婆羅門と大

表 1

	名 称	巻	段	弓を持つもの	制 作 年
1	吉備大臣入唐絵巻		1	唐の役人	12世紀後半 (1170~80)
2	地獄草紙 ① (益田家乙巻) ② (模本甲)		5 1.3	毘沙門天 地獄の鬼 尊の従者	12世紀後半 12世紀後半 12世紀後半 (17世紀の模本)
3	彦火々出見尊絵巻	4.5			
4	北野天神縁起絵巻 ① (承久本)(a) (b) ② (メトロポリタン本)	8 8 3		畜生道の狐師 第一羅睺阿修羅と 帝釈天の軍の兵士 大政威徳天の眷属	承久元(1219)  13世紀後半
5	東征伝絵巻	2	4	唐の役人	永仁6(1298)
6	玄奘三蔵絵 (a) (b) (c) (d) (e)	2 2 4 7 8	2 2 6・7 4 2	異形の軍団の兵士 第一烽の衛士 殍伽河の海賊 戒日・国の役人 "	鎌倉時代末     鎌倉時代末
7	蒙古襲来絵詞			元軍の兵士	鎌倉時代末
8	神於寺縁起絵巻 (a) (b) (c)	上 上 上	4 4 7	宝勝権現 竜 宝勝権現	鎌倉時代末   鎌倉時代末
9	聖徳太子絵伝 ① (上宮寺本) ② (堂本本)		5 2 6	蝦夷(えぞ) 新羅軍の兵士 地獄の鬼	元亨3(1323) 元亨4(1324)頃 南北朝期
10	地藏菩薩霊驗記絵		3	地獄の鬼	南北朝期
11	弘法大師行状絵詞 (a) (b) (c)	2 3 4	6 4 1	マール(魔障) 唐の役人 神	14世紀後半   鎌倉時代末
12	八幡縁起絵巻		5	新羅軍の兵士	康応元(1389)
13	神功皇后縁起絵巻	上	4	新羅軍の兵士	永享4(1433)
14	清水寺縁起絵巻	上	11	蝦夷(えぞ)	永正14(1517)
15	桑実寺縁起絵巻	下	3	薬師如来を擁護する 十二神将の眷属	享祿5(1532)
16	日蓮聖人註画讃	5	3	元軍の兵士	天文5(1536)
17	長谷寺縁起	2	4	菅原道真の従者	16世紀
18	釈迦堂縁起	2	4	釈迦を襲う悪魔	16世紀

## （註）

- 1 ポストン美術館所蔵。制作時期については、小松茂美『『吉備大臣入唐絵巻』考証』（日本絵巻大成3『吉備大臣入唐絵巻』所収）によった。
- 2 ⑥は東京国立博物館所蔵。ともに新修日本絵巻物全集7に収載されている。制作時期については、秋山光和「地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙の絵画」（同上書所収）によった。
- 3 明通寺所蔵。17世紀の模本ではあるが、原本を忠実に再現したものと考えられる（小松茂美：『『彦火々出見尊絵巻』の制作と背景』、日本絵巻大成22所収）。
- 4 ④は北野天満宮所蔵。⑤はメトロポリタン美術館所蔵。制作時期については、村瀬美恵子「メトロポリタン本天神縁起絵巻」（新修日本絵巻物全集別巻2所収）によった。
- 5 唐招提寺所蔵。
- 6 藤田美術館所蔵。制作時期については、源豊宗「玄奘三蔵絵綜説」（新修日本絵巻物全集15所収）および中野玄三『『玄奘三蔵絵』概説』（続日本絵巻大成9所収）によった。
- 7 宮内所蔵。
- 8 (a)はジャクソン・パーク夫妻コレクション。(b)はホノルル・アカデミー美術館所蔵。(c)はネルソン・ギャラリー＝アトキンス美術館所蔵。制作時期については、秋山光和『『神於寺縁起絵巻』の復元と考察』（『在外日本の至宝2・絵巻物』所収）によった。
- 9 (i)は茨城県上宮寺所蔵。同様の場面が描かれたものに、四天王寺所蔵本（6幅のうち第2幅。元亨3年制作）、平泉寺所蔵本（掛軸）など、いくつか見られる（奈良国立博物館編『聖徳太子絵伝』）。(ii)は、堂本四郎氏所蔵（10巻本）。
- 10 根津美術館所蔵。制作時期については、梅津次郎「地藏菩薩絵巻解説」（新修日本絵巻物全集29所収）によった。
- 11 東寺所蔵。制作時期については、真鍋俊照「弘法大師行状絵詞の絵画化」（続日本絵巻大成6所収）によった。
- 12 シカゴ・アジア美術館所蔵。
- 13 菅田八幡宮所蔵。
- 14 東京国立博物館所蔵。
- 15 桑実寺所蔵。
- 16 本隠寺所蔵。
- 17 奈良、長谷寺所蔵。
- 18 清涼寺所蔵。



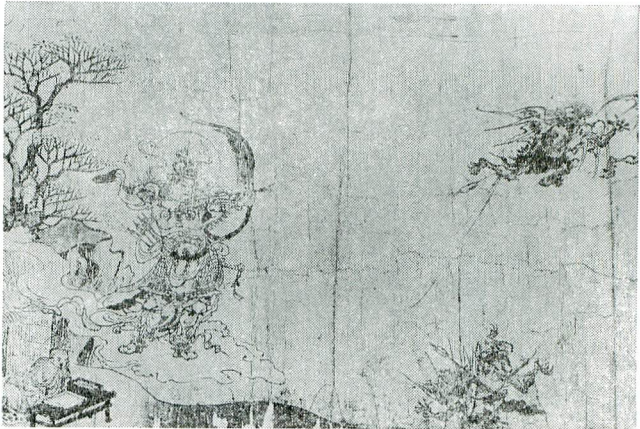


図4 「地獄草紙」(益田家乙巻) 第5 段

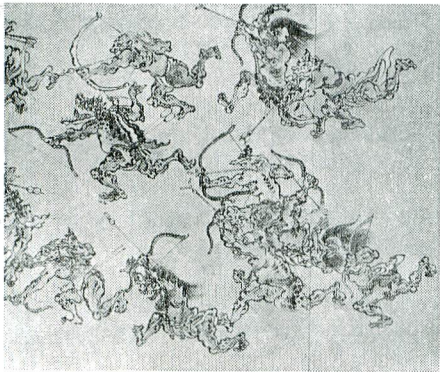


図5 同上(東博本模本甲) 第3 段

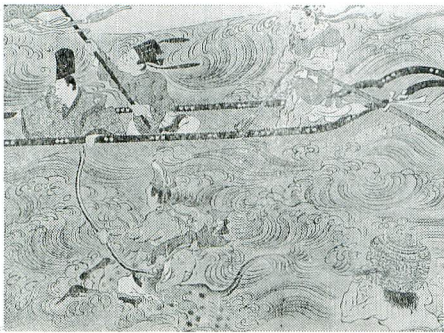


図6 「彦火々出見尊絵巻」第4 巻

図7 「北野天神縁起  
絵巻」(承久本)  
第8巻畜生道

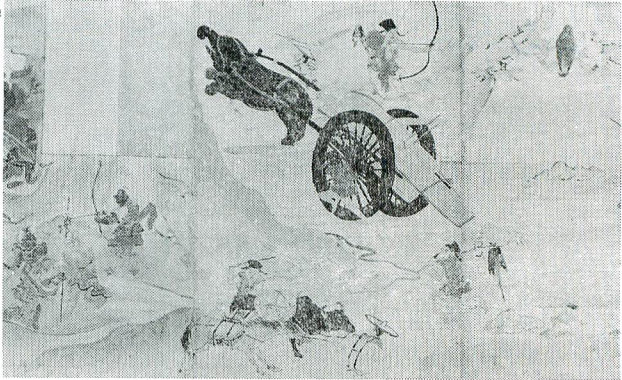


図8 同上 第8巻修羅道



図9 「東征伝絵巻」第2巻第4段

『蒙古襲来絵詞』の歴史資料としての価値(清水)



図10 「玄奘三蔵絵」第  
4巻第7段

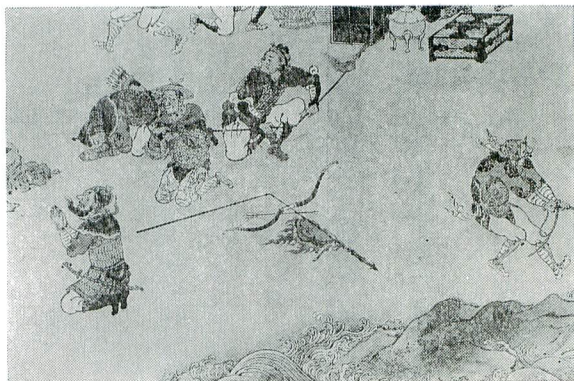


図11 「神於寺縁起絵  
巻」上巻第4段



図12 「地藏菩薩靈驗  
記絵」第3段





図13 「弘法大師行状  
絵詞」第2巻第6  
段

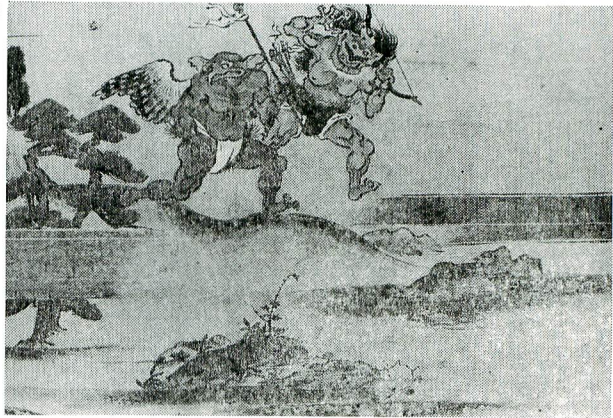


図14 「清水  
寺縁起  
絵巻」上  
巻第11段

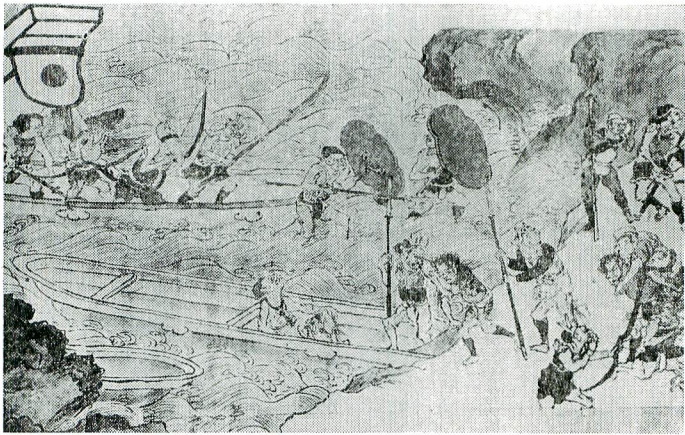
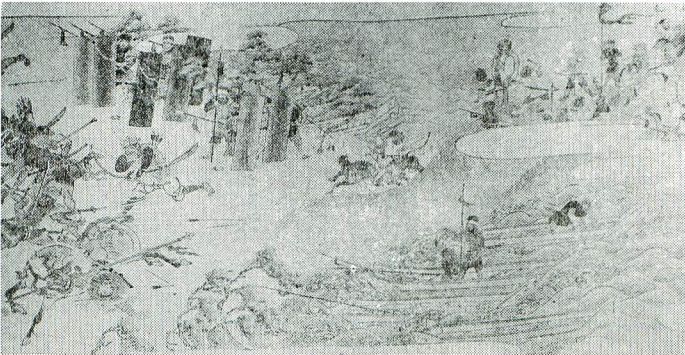


図15 「日蓮  
聖人註画  
讃」第28  
「蒙古責  
来」



乗・小乗の是非を論ずる場面。(e)第八卷第二段、戒日王が夜中に玄奘の幕舎を訪れる場面。両場面で戒日国の役人が、式の短弓を持つのが見られる。

⑦『蒙古襲来絵詞』では、日本軍と戦う元軍を描いた場面が、すでによく知られているように、数多く見られる。元軍の兵士が、式の短弓を用いているのがよくわかる(図2)。

⑧『神於寺縁起絵巻』では、(a)上巻第四段(絵5)、鬼神と対面している宝勝権現の持つ弓が、式の短弓である(図11)。同じく(b)上巻第四段(絵6)、宝勝権現と役行者との対面のさい、庭上にひかえている竜神の持つ弓が、式の短弓である。また、(c)上巻第七段(絵10)、神於寺の荒廃に怒る宝勝権現を描いた場面では、宝勝権現の持つ弓が、式の短弓である。

⑨①『聖徳太子絵伝』(上宮寺所蔵本)第五段は、蝦夷たちが太子の前にひざまずいて、盟約を誓っている場面である。そのうちのひとりの蝦夷が右脇に、式の短弓をさみ持っている。⑨(堂本氏所蔵本)第六卷第二段では、浜辺で矢を射、矛をふるっている新羅軍にむかって進む日本軍の船団を描いている。ここに描かれている新羅軍の兵士たちの持つ弓が、式の短弓である。

⑩『地藏菩薩靈驗記絵』第三段。地獄の鬼が子供を矢で射る場面が描かれているが、その鬼の持っている弓が、式の短弓である(図12)。

⑪の『弘法大師行状絵詞』では、(a)第二卷第六段に、弓と宝珠棒を持して退散しようとする二人のマール(魔障)が描かれているが、そのうちのひとりの持つ弓が、式の短弓である(図13)。(b)第三卷第四段、長安城を警固する役人の持つ弓が、式の短弓である。(c)第四卷第一段。珍賀の夢の中に二人の神人があらわれ、珍賀を責めたてているが、右側の神人が脇にはさみ持つ弓が、式の短弓である。

⑫『八幡縁起絵巻』(シカゴ・アジア美術館所蔵)第五段、⑬『神功皇后縁起絵巻』上巻第四段では、神功皇后の軍と戦う新羅軍が描かれているが、彼らの持つ弓が、式の短弓である。これら両場面では、右手に海上の日本軍、左手に陸上の新羅軍が描かれているが、両軍の兵の持つ弓が意識されて明確に描き分けられているのがわかる。

⑭『清水寺縁起絵巻』上巻第十一段(図14)。坂上田村麻呂に征討される蝦夷たちの持つ弓が、式の短弓である。

⑮『桑実寺縁起絵巻』下巻第三段。薬師如来を擁護する十二神将の眷属たちの持つ武器のなかに、式の短弓がみられる。

①⑥『日蓮聖人註画讃』第二十八「蒙古貴来」(図15)。元軍の兵士たちの持つ弓が、ㄥ式の短弓である。

①⑦『長谷寺縁起絵巻』第二巻第四段。雲上の菅原道真の従者の持つ弓が、ㄥ式の短弓である。

①⑧『釈迦堂縁起』第二巻第四段。釈迦を襲う悪魔の持つ弓が、ㄥ式の短弓である。

以上、絵巻のなかでㄥ式の短弓<sup>(7)</sup>が見られる場面をあげてきたが、これらから明らかになように、ㄥ式の短弓は、『蒙古襲来絵詞』のみに見られるものではない。そして、さらにそれらの場面をくわしく見てゆくならば、ㄥ式の短弓の見られる場面、あるいはそれを持つ人物は、およそ次の三つに分類することができよう。

#### A 異国・異国人

- ①、⑤、⑥(b)ㄥ(e)、⑦、⑨—①—ㄥ、⑪(b)、⑫、⑬、⑭、⑯

#### B 異界(地獄など)

- ②—ㄥ、③、④—①(a)・(b)、⑥(a)、⑩、⑪(a)、⑯、⑰

#### C 仏神

- ②—①、④—ㄥ、⑧(a)ㄥ(c)、⑪(c)、⑯

右の三つの分類では、BとCの区別は必ずしも明確では

『蒙古襲来絵詞』の歴史資料としての価値(清水)

なく、Cに分類した毘沙門天や宝勝権現なども、異界に住み、時に応じ人間の世界へやって来る、と考えられるわけであるから、BとCを同じとみなすことも可能である。そうすれば、Aは実際に存在する異国、B・Cは想像上の異国<sup>(8)</sup>異界、と考えられよう。

いずれにしても、すべて自分たちの住んでいるこの世、この国とは異なるところである、ということが意識された世界であることは間違いない。もしそのように見ることができれば、ㄥ式の短弓は、異国・異界のひとつの象徴である、と言えよう。おそらく、中世の人々にとっては、自分たちが今生活している世界の外である、ということにおいては、中国や朝鮮、インドなどの異国も、地獄や龍王国などの異界も、同一のものと意識されていたのではなかろうか。<sup>(9)</sup>そのように考えれば、唐の役人の持つ弓と地獄の鬼の持つ弓が同じ形に描かれているのも、納得のゆくことである。

したがって、『蒙古襲来絵詞』に見られるㄥ式の短弓は、蒙古軍が実際に使用した弓を絵師が忠実に写しとったのではなく、たんに異国人の表現のひとつだったのであり、そのような意味でこの絵巻のみを他の絵巻と異なった特殊なものとするべきではなく、『吉備大臣入唐絵巻』以下の絵

巻と同一線上におくべきであると考える。<sup>(10)</sup>

## 第二節 短弓の系譜

前節では、中世の絵巻に描かれた $\times$ 式の短弓が、異国・異界の象徴のひとつとなっている、と述べたが、本節では、はじめに、その系譜はどこに求められるかについて考えてい。

十二世紀に描かれた『吉備大臣入唐絵巻』以来、中世の絵巻に描かれた「異国人」の持つ $\times$ 式の短弓には、何か「手本」となるものの存在が充分予想される。その「手本」を捜すさいの手がかりになるのが、前節の②―④、『地獄草紙』(益田家乙巻)第五段に描かれた毘沙門天(図4)と、⑧(a)『神於寺縁起絵巻』上巻第四段に描かれた宝勝権現(図11)である。毘沙門天などの仏神は、絵巻以外の絵画においては、どのように描かれているのであろうか。仏画に描かれている弓は、短弓なのであろうか、長弓なのであろうか。そこで、中世の仏画をいくつか見てみよう。

- ①降三世明王(岐阜、来振寺蔵、十一世紀末制作)(図16)
- ②金剛棄叉明王(京都、醍醐寺蔵、十三世紀初制作)(図17)
- ③火曜星(ニューヨーク公立図書館蔵、平安後期制作)

## (図18)

これら、明王などの持つ弓は $\times$ 式の短弓である。このことから、異国・異界の象徴である $\times$ 式の短弓が、仏画の明王などが持つ弓からの借用であることが考えられよう。ことに、②、③の弓の上部先端の部分、末弭(うらはず)が二つに割れているところなど、『蒙古襲来絵詞』に見られる、元軍の兵士たちの持つ弓とよく一致している。

絵巻と仏画との関係については、すでに小松茂美氏が、『吉備大臣入唐絵巻』に見られる武人の描写について、次のように述べている。

「甲冑を身につけるものは、おおむね、天部の仏像彫刻や図像などに依拠しているようである。ことに、毘沙門天像などのそれを連想させるものがある。<sup>(11)</sup>」

また、梅津次郎氏は、『吉備大臣入唐絵巻』に發揮された異国の趣味をとりあげて、そこに描かれた唐風俗の典拠として、世俗的題材の唐絵のほか、平安時代の寺院の壁に画かれた仏教説話画にも求められたであろう、と述べている。<sup>(12)</sup>

『吉備大臣入唐絵巻』については、小松氏および梅津氏が、仏画の影響が認められることを指摘しているが、それは、この絵巻に限らず、異国を描いたほとんどすべての絵





図17 金剛蔵叉明王（醍醐寺蔵）

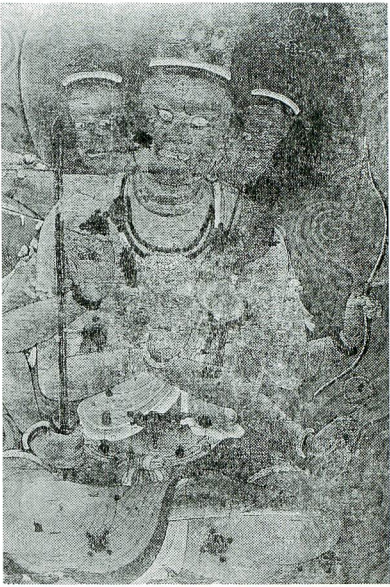


図16 降三世明王（来振寺蔵）



図18 火曜星（ニューヨーク公立図書館蔵）

巻について言えることであらう。そして、弓の問題に限っていえば、はじめは仏画に見られるゝ式の短弓が、異国・異界表現のための有効な手段として絵巻にとり入れられたのが、次第に固定化され、やがて異国・異界の象徴にまで高められたのではなからうか。

ついで、『蒙古襲来絵詞』が、仏画からどのような影響を受けているかについてみてみよう。同絵巻上巻第七段(図2)は、日本史の教科書などにもよく載せられる、きわめて有名な場面である。しかし、ここに見られる三人の人物は、見る者にある種の不自然さを感じさせる。つまり、顔貌の異様さと、弓を射るさいの体をひねった前かがみの姿勢である。三人の兵士が、蒙古人であるにしろ、あるいは高麗人であるにしろ、人種的には日本人ときわめて近いのであるから、もし忠実に描くとすれば、その顔貌は日本人によく似たものでなければならぬ。これを見ると、意図的に異様に描こうとしたのではないかとさえ思えてくる。また、弓を射る二人、ことに下方にいる、今まさに弓を射ようとする兵士(図19)のような、腰をまげた姿勢で弓を射ることができるのであらうか。古くより、日本の弓道では、まず上体をまっすぐにして弓を構えるのが基本とされる<sup>(13)</sup>。洋弓でも同様で、弓を射るときは、上体はまっす

ぐにしている。右上方にいる兵士(図20)の右手はどうであらうか。いかにも力強そうに描かれてはいるが、弓を射るときはそれではない。

二王像のなかには、これに似た顔貌を持ち同じような姿勢をとっているものがある。たとえば、平安時代に制作された醍醐寺の木造金剛力士立像・吽形(図21)や鎌倉時代に制作された妙法院の木造密迹金剛立像(図22)を見てみよう。身体全体の形、ことに右手の形は、この兵士の姿とよく似ている。

おそらくは、『蒙古襲来絵詞』を描いた絵師は、仏画や仏像に関する十分な知識があり、それらをもとにして、蒙古軍の兵士を描いたのであらう。

### むすび

『蒙古襲来絵詞』の詞書のなかで、蒙古軍のことをどのようなことばで表しているかをみてゆくと、六通りの表現をしているのがわかる。まず、最も多く出てくるのが、「凶徒」の四回、次いで「賊徒」、「敵」の各二回。そして、「異賊」、「蒙古」、「異敵」がそれぞれ一回ずつである。「凶徒」、「賊徒」という表現よりわかるように、詞書は客観的な表現から遠く、そこには強い感情の表われが感じら



『蒙古襲来絵詞』の歴史資料としての価値（清水）



図20 「蒙古襲来絵詞」



図19 「蒙古襲来絵詞」



図22 塑造金剛力士立像  
（法隆寺像）



図21 木造金剛力士立像吽形  
（醍醐寺蔵）

れる。このような性格は詞書だけでなく、絵の部分についても言えるのであり、この絵巻自体が客観的な事実の描写を行おうという意図を持って描かれたものではなかったのである。

この絵巻が、文永・弘安の役の全貌を表したのではなく、竹崎季長という個人の合戦での活躍を絵巻にしたものであることは、つとに指摘されていることで、それゆえ、この絵巻は「竹崎季長絵詞」と称されることがある<sup>(1)</sup>。したがって、この絵巻作成の目的からみて、合戦の状況を必ずしも忠実に写し出すことは必要ではなく、むしろ、蒙古軍を現実からかけ離れた強敵として、恐ろしげに描いた方が、季長の活躍はいっそうきわだつのである。つまり、自分たちと姿形がごく近い敵と戦ったのではなく、「異界」の人間、凶徒と戦ったのであり、そのためには、敵は日常とかけ離れた存在であったほうが、この絵巻としての効果は、よりいっそう高められるのである。そして、蒙古軍の使用した武器や武具についても、現実の蒙古軍のものを忠実に再現したのではなく、絵巻としての効果を生むために、さまざまな工夫がなされたのではないかと考えられるのである。したがって、『蒙古襲来絵詞』を信憑性の高い歴史資料として用いて、当時の蒙古軍との合戦の様子を語

ることは問題が多く、その前に充分な史料批判が行われなければならないのである。

# 註

- (1) 黒田俊雄『蒙古襲来』（『日本の歴史』第8巻、一九六五年）、秋山光和編『絵巻物』（『原色日本の美術』第8巻、一九六八年）、村田正志『蒙古襲来絵詞』の再検討、鈴木敬三『蒙古襲来絵詞』覚書（ともに『日本史籍論集』下巻八一、一九六九年／所収）、石井進『竹崎季長絵詞解題』（日本思想大系21『中世政治社会思想』上巻八一、一九七二年／所収）、網野善彦『蒙古襲来』（『日本の歴史』第10巻、一九七四年）、中村溪男『蒙古襲来絵詞』（『古画名作裏話』八一、一九八六年／所収）、村井章介編『蒙古襲来』（『週刊朝日百科』日本の歴史第9巻、一九八六年）、石井進『蒙古襲来絵詞』と竹崎季長（『鎌倉武士の実像』八一、一九八七年／所収）ほか。

- (2) 吉田光邦氏は、「蒙古襲来絵詞に於ける武器について」『新修日本絵巻物全集』第10巻八一、一九七五年／所収）で、「中央に握りがあり、弓の形をしているのは宋式の弓である。黄櫨弓、白櫨弓などといわれた。一般に短弓である。」（八九頁）と述べている。

桜井清香氏は、『元寇と香長絵詞』（一九五七年）で、絵詞に表れた元軍の武装について記したなかで、「我が軍の

弓は古来より長弓であるが、敵軍は短弓である。従つて矢も短く矢筒に入れている。『八幡愚童記』に拠れば、矢の根に毒が塗つてあるとのこと。(一〇四頁)と述べている。

また、弓は原始社会の段階から世界各地でみられ、各地域で発達をとげ、それぞれ異なった形態を持つが、それらは大きさによって、おおよそ短弓と長弓の二種類に分けることができる。アジア遊牧民などは短弓を使用するのに対し、日本では一般に長弓が用いられていた(『世界大百科事典』八一九八一年▽「弓」および「弓矢」の項へ鈴木敬三執筆)。今日、国内にのこされている遺品を見ると、正倉院宝物の奈良時代の梓弓は長さ一六六センチメートル、槻弓は二一六センチメートル、若宮御料古神宝類の平安時代の蒔絵弓は長さ一八七センチメートル、三島明神奉納武器類の鎌倉時代の塗籠所々巻弓は長さ二二六・五センチメートルで、いずれも長弓である(東京国立博物館編『日本の武器武具』、一九七六年)。

- (3) 鈴木敬三氏は、『初期絵巻物の風俗史的研究』(一九六〇年)のなかで、『吉備大臣入唐絵巻』について、『唐朝使臣の太刀や護衛兵の半弓に於いて、半弓はすべて握りの位置を弓長の中央とせず、中央より本弰近くして、支那式の半弓に特殊の日本様式を混入させて居る』と述べている(五三〇頁)。

- (4) 奈良国立博物館編『聖徳太子絵伝』(一九六九年)所収

『蒙古襲来絵詞』の歴史資料としての価値(清水)

の上田英次氏・菊竹淳一氏による「事蹟解説」のなかでは、「新羅軍の弓は、中央に握りのあるも型のもので、槍は長槍である。」と述べられている。

- (5) 白鶴美術館所蔵『弘法大師伝絵巻』第三巻第三段では、珍賀が夢の中で四天王に責められる場面が見られるが、そのうちの一人は弓式の短弓を手にしている。

- (6) 『八幡縁起絵巻』は、今日数多くのこされているが、東大寺所蔵の『八幡縁起絵巻』(宋軒筆、天文八年)、柞原八幡宮所蔵の『由原八幡縁起絵巻』(土佐光茂筆、十六世紀)などにも、同様の場面が見られる。

- (7) 弓式の短弓といっても、それぞれをよく見ると、形状は少しずつ異なっている。しかし、日本の弓が、いずれもまっすぐに、身長よりも長く描かれているのと比較すれば、これらの弓を弓式の短弓としてひとまとめにすることが可能であろう。

- (8) 中世においては、蝦夷の住む北海道は、国家領域の外の地、つまり「異域」と位置づけられていた(榎本進『蝦夷地』の歴史と日本社会)、網野善彦他編『日本の社会史』第一巻八一九八七年▽所収、および伊藤喜良「中世日本の国家領域と異類異形」、『歴史学研究』五七三号八一九八七年▽所収)。

また、佐々木利和氏は中世の絵巻に描かれた蝦夷について、注目すべき見解を発表している。小稿と関連する部分に限っていえば、『清水寺縁起』に見られる蝦夷の執る武



器武具などは、『蒙古襲来絵詞』のそれとよく似ている。それは、絵師が蝦夷のイメージを具体化するにあたって、『蒙古襲来絵詞』を範としたからであらう、と述べている（『異族の虚像——『清水寺縁起』の蝦夷』、『月刊百科』三二六号／一九八九年／所収）。

(9) 黒田日出男氏は、『地獄の風景』（『妄としぐさの中世史』／一九八六年／所収）のなかで、次のように述べている。

「中世絵画史料に登場する他界の風景の一つには異国の風景があるが、それはもっぱら「唐」の世界についての人々のイメージであって、現実をどれほど正確に把握していたかは問題ではないのである。当時の日本における唐人達の姿、絵画による情報、実際に行った人の話やそれを聞いた人々の尾ひれ、そして画家や人々の想像力が織りなす重層化したイメージとして他界としての異国は存在した。」（一九九頁）。

(10) ゝ式の短弓が異国のひとつの象徴である、という点については、絵巻に限ることではなく、屏風絵についても指摘できる。その一例をあげれば、時代はやや下るが、桃山時代の狩野宗秀筆と伝えられる「韃靼人狩猟・打毬図」（サンフランシスコ、アジア美術館所蔵、六曲一双）の左隻第二・三扇に描かれている馬上の人物が持つ弓はゝ式の短弓である。

また、江戸時代に制作された絵巻の中にも、異国の象徴としての弓が見られる。その一例として、十八世紀、狩野

山雪筆と伝えられる『長恨歌画卷』（アイルランド、チェスター・ビーター・ライブラリー所蔵、『日本の物語絵』展カタログ／サントリー美術館、一九八八年／収載）をあげることができる。巻一、安祿山の反乱軍のために、長安が炎上し、玄宗と楊貴妃が長安の都を脱出する場面である。反乱軍のなかにある、馬上の一兵士が左手に持つ弓がゝ式の短弓である。

(11) 小松茂美『吉備大臣入唐絵巻』考証（日本絵巻大成3『吉備大臣入唐絵巻』所収）第五章、一四六頁。

(12) 梅津次郎『粉河寺縁起絵と吉備大臣入唐絵』（新修日本絵巻物全集6『粉河寺縁起絵・吉備大臣入唐絵』／一九七七年／所収）一五頁。

(13) 武士生活研究会編『絵図でさぐる武士の生活』Ⅲ（一九八二年）。

(14) 荻野三七彦『竹崎季長絵詞』の研究史（日本絵巻大成14／一九七八年／所収）、石井進『竹崎季長絵詞解題』（日本思想大系21『中世政治社会思想』上巻／一九七二年／所収）、ほか。